

## 2025.5.4.

### 「神の言葉、キリスト」

旧約 創世記 1章 1～5節

新約 ヨハネによる福音書 1章 1～5節

#### 1. はじめに

今日からヨハネによる福音書を順に読み進めながら、御言葉を受けてまいります。ヨハネによる福音書は、他の三つの福音書マタイ・マルコ・ルカとは、その書き方が大きく違います。マタイ・マルコ・ルカの三つの福音書は、イエス様の為さったこと、お語りになったこと等を順追って記していくという形を取っています。しかし、ヨハネによる福音書はイエス様の言葉や御業を記すのですが、その際に象徴的な言葉を用いて、しかもその言葉の意味やニュアンスが幾重にも重なるようにして、イエス様が誰であるのか、イエス様の与えてくださった救いとはどういうものなのかということ語ります。ヨハネによる福音書はマタイやルカよりも10年～20年ほど後に記されました。ですから、ヨハネは三つの福音書を知っていました。ですから、同じように福音書を記す必要はないと思ったのかもしれませんが。ヨハネは印象的な、そして象徴的な言葉を用いて、福音を語りました。象徴的な言葉が多いものですから、そもそも聖書が何を語ろうとしているのかを理解していませんと、何を言っているのかさっぱり分からない、或いは全く誤解してしまうということにもなりかねません。ですから、求道者の方が聖書読む順番としては、私はヨハネによる福音書を最初に読むことは勧めません。最初はルカによる福音書が良いでしょう。ルカは旧約聖書を知らない異邦人向けに記されているからです。少し難しい所はあっても、聖霊なる神様の導きの中で、ヨハネによる福音書の言葉を通して語られる神様の語りかけを、ご一緒にしっかり聞き取ってまいりたいと思います。

#### 2. 「言」「命」「光」「暗闇」

さて、今朝与えられているヨハネによる福音書の冒頭の部分ですが、ここは18節まで続くヨハネによる福音書のプロローグ、序章、福音書全体の導入部分となっています。ここは、ヨハネによる福音書の特徴が極めてよく現れているところです。今朝与えられている1～5節は、「言」「命」「光」「暗闇」といった象徴的な言葉を用いて、この福音書がこれから語っていくという内容なのかを記しています。聖書を初めて読んだ人が、ここを読んで正しくその意味を読み取るのはほとんど無理ではないかと思われる所です。用いられている言葉は、とても単純です。難しい言葉は何も使われていません。書き方にしても、とても単純です。神学校でギリシャ語を

習い始めて、最初に読むのがヨハネによる福音書です。文法的にはとても簡単な、単純な文章だからです。ところが、書かれている内容は、少しも簡単ではありませんし、単純でもありません。順に見ていきましょう。

### 3. 初めに言があった：初めにキリストがおられた：先在のキリスト

「初めに言があった」とヨハネによる福音書は語り始めます。50年前にヨハネによる福音書を読んだ時、この一文だけで、「何を言っているのかさっぱり分からない」という感想を持ったことを覚えています。まず「初めに」ですけれど、何の初めなのか、ここだけではさっぱり分かりません。これは先ほど聖書の一番最初の所、創世記の第1章1節を読みましたが、そこには「**初めに、神は天地を創造された。**」とありました。この創世記が告げる「初めに」は、天も地も何もなかった「初め」です。時の始まりと言っても良いかもしれませんが。ヨハネによる福音書は、この創世記の冒頭の言葉を意識して、何も存在しなかった全ての時の初めに「言があった」と告げているわけです。

ではこの「言」とは何なのか？全てが存在する前からあった「言」。そして、この「**言は神と共にあった。**」と続き、更に「**言は神であった。**」と語ります。そして、繰り返すように「この言は、**初めに神と共にあった。**」と告げます。この「言」はいったい神様なのか、そうではないのか、全く混乱してしまいます。この「言」と訳されている言葉はギリシャ語では「ロゴス」と言いますが、この「ロゴス」という言葉はまさしく「言葉」という意味の単語なのですが、それ以外に何十という訳語を当てることが出来る言葉です。例えば「言葉、言語、話、真理、真実、理性、論理、理由、定義、理論、思想、教義、法則、原因、根拠、秩序、原理、本性、知性、分別」といった具合です。どうしてこういうことになるかと言いますと、このヨハネによる福音書が記された時代、おそらく紀元後90年代後半だと思いますが、このロゴスという言葉はギリシャ哲学においてはとても重要な意味を与えられ、この世界を哲学的に語ろうとする場合のどうしても欠かせない基本的な言葉の一つとなっていました。「ロゴス」は事物を存在させる普遍の原理であり、全ての者が従うべき法であり、これに聞き従う理性をも意味しました。この当時の人たちが信仰抜きに、この世界を成り立たせているものとして「ロゴス」というものを考えていたわけです。ヨハネによる福音書はこのことはっきり意識して、あえて「ロゴス」という言葉を用いたのでしょう。多分、私共が感じるこの「言」に対しての訳のわからなさは、当時の人にとってはあまりなかった。「ああ、ロゴスね。何かロゴスについての話ね。」といった感じで受け取ったのではないかと思います。

大切なことは、この「ロゴス」という言葉によってヨハネが伝えようとしたもの、語ろうとしたものは「キリスト」だったということです。それは、この「言」を「キリスト」と読み替えま

すと、そのことがはっきりします。「**初めにキリストがおられた。キリストは神と共にあった。キリストは神であった。キリストは、初めに神と共にあった。**」どうでしょう、アーメンでしょう。しかしこのロゴス、「言」の所に、キリスト以外の言葉を入れては、全くおかしいことになります。ヨハネによる福音書は、世の人たちが「ロゴス」として論じているものこそキリストなのだ。そう宣言してこの福音書を書き始めたわけです。

ここで聖書は「**初めに言があった**」、つまり「キリストは全てのものに先立っておられた」と告げます。これを「**先在（先に存在していたと書きます）のキリスト**」と言います。そして、その「キリストは神と共におられる神である。」と告げるわけですが、これはキリストを三位一体の神であると告げているわけです。実に、ヨハネによる福音書は、その最初から「三位一体の神様としてのキリスト」、全てに先立って存在する「**先在のキリスト**」を「**ロゴス**」という言葉を用いて告げているわけです。

イエス様というお方は、この「**ロゴス**」であるキリストが肉体をとって、人として来られた方だということです。14 節で「**言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。**」と告げられていることが、それです。「キリストは肉体をとって、わたしたちの間に、人間として来られた」これがヨハネによる福音書が告げるクリスマスです。キリストがイエスとして生まれた、だからイエス・キリストと言うわけです。これがクリスマスです。ここで大切なことは、神様であるキリストが人となられたのであって、人が神様になったのではないということです。

#### 4. 万物は言によって成った：創造主キリスト

続いて「**1:3 万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。**」と聖書は告げます。聖書は創世記の第 1 章で、天と地の全てのものは神様によって造られたと告げているわけですが、その神様が天地を造られた時、キリストもおられ、キリストもまた父なる神様と共に天と地の全てを造られたと告げているわけです。三位一体の神様とは父なる神様・子なるキリスト・聖霊なる神様ですが、私共はそのお働きによって父なる神様を造り主、子なるキリストを贖い主、聖霊なる神様を助け主、と呼びます。これは長く言い習わされてきたものですけれど、三位一体の神様は永遠から永遠まで、一つであられるということを見落としてしまいかねない懸念があります。つまり、父なる神様が天地を造られた時、子なるキリストも聖霊なる神様もその業に参加せず、天地創造はただ父なる神様だけの御業であるかのように思い違いしてしまうという危険です。天と地を造られたのは三位一体の神様の御業です。そして、私共の罪が赦されたのは、イエス様の十字架と復活の出来事によるわけですが、これもイエス様が単独で為されたわけではありません。三位一体の神様の御業です。また、私共が御国に向かって歩んでいる日々の歩みにおいて私共を助け、支え、導いてくださるのも、聖霊なる神様だけのお働

きではありません。イエス様が私共に聖霊を遣わしてくださり、三位一体の神様が私共に働きかけ、道を開き、出来事を起こし、出会いを与え、導いてくださっている訳です。

こう言っても良いでしょう。天地を造られた時、聖書の記述においては父なる神様が前面に出ておられるけれども、聖霊なる神様も、子なるキリストもその御業に参加していた。では、そのことは創世記1章のどこに現れているでしょう。聖霊については「**1:2 地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。**」とあります。混沌と闇の中に、既に聖霊なる神様はおられました。では子なるキリストはどうでしょうか。「**1:3 神は言われた。『光あれ。』こうして、光があった。**」と創世記は告げています。この神様が「光りあれ」と告げられた、この言葉。何もないところから、混沌と闇しかなかった所に光を生み出した神の言葉、神のロゴス、これがキリストです。この神の言葉であるキリストによって、世界は造られました。そして、この全てを造られた神の言葉であるキリストが、私共の内に宿り、私共を救い、私共に命を与え、私共に力と希望と勇気を与えてくださっている。その恵みの中で私共は一日一日を生かされているわけです。何とありがたいことでしょう。

## 5. 命の言葉キリスト

続いて、ヨハネによる福音書は「**1:4 言の内に命があった。**」と告げます。キリストの内には命がある。この命とは、永遠から永遠まで変わることなく生きたもう神様の命、つまり永遠の命です。この永遠の命は、イエス様の御復活によって私共に明らかに示されました。しかし、キリストはイエス様が復活されたから永遠の命を得たというわけではありません。キリストは、三位一体の神様ですから、元々永遠の命をもっておられるお方です。この命は、全て命あるものの源である命と言っても良いでしょう。私共はこの方によって命を与えられ、この地上での歩みが始まりました。確かに、私共は父と母から生まれたわけですが、それは父と母を通してこの方の命が私共に注がれたということです。ですから、私共の命は自分のものでもありませんし、父や母のものでもありません。神様のもの、キリストのものです。

そして「**命は人間を照らす光であった。**」と続きます。私共はキリストと結ばれることによって、キリストの持つ永遠の命に与ることになりました。この肉体の死では終わらない永遠の命こそ、私共に与えられたまことの光、まことの希望です。肉体の死によっても奪われることのない光、まことの希望です。ヨハネによる福音書は、キリストが与えてくれるこの永遠の命、人を照らすまことの光であるキリストが来られた、このことを伝えようとして記された。そう、ここで宣言しているわけです。

## 6. まことの光であるキリスト

そして、今朝与えられている最後の言葉、5 節「**光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。**」です。ここでキリストの光と世界の闇が対比されて告げられています。この言葉は、よくクリスマスの燭火礼拝、キャンドル・サービスの時に読まれます。電気を落として、真っ暗になった礼拝堂に、ろうソクの光だけが輝きます。そして、そのろうソクから、会堂に集った一人びとりが持っているろうソクに火が移されていき、会堂全体が明るくなります。そして、クリスマスの讚美歌が歌われ、御子の御降誕を喜び祝うメッセージが告げられます。永遠の命を持つお方が、私共を救うために、私共に代わって肉体の死を味わい、陰府に降るために、マリアから生まれた。それがクリスマスの出来事です。

ここで「暗闇」と言われているのは、この世界であり、私共自身です。神様が造られたこの世界は、良きもので満ちているはずでした。しかし、私共の目にしているこの世界は、光に輝いているでしょうか。確かに、季節は巡り、冬は過ぎ、様々な花が咲き乱れる春が来ます。花を愛でれば、しばし辛いことは忘れるかもしれません。しかし、この世界には様々な嘆きがあり、苦しみがあり、争いがあり、その暗闇が世界を覆っています。その暗闇は、私共の罪から生じました。罪の闇に生きている人間は、光を求めません。自分が闇の中に生きていることも分からないからです。光に照らされて、初めて自分の罪、自分の心の闇、自分が生きている世界の闇に気が付きます。私はこの罪の暗闇に生きる者のあり方を、よくゴキブリに喩えます。ゴキブリは暗いところが好きです。暗いところから明るいところに出てきても、すぐに暗闇の中にササッと戻っていきます。罪人の最大の特徴は、自分が罪の闇の中にいることに気が付かず、その状態に不都合を感じず、むしろその状態を喜んでいるということです。光を知らないからです。それが「**暗闇は光を理解しなかった。**」ということです。

人間の犯した最も明らかな、最も深い罪とは、人間が神の御子であるイエス・キリストを十字架に付けて殺したことです。明らかな神様への反逆、神様への敵対行為です。どうして、そのようなことが起きたのか。それは彼らがイエス様が誰であることを理解しなかったからです。イエス様がキリストだと分からなかった。神の独り子だと分からなかったからです。イエス様より自分の方が正しいと信じて疑わなかったからです。暗闇が光を理解しないのは、何時の時代でも、どこの国や地域でも同じです。罪が我が物顔に闊歩している。それが、この世界の現実です。しかし、その暗闇の中で、キリストの光は輝いているし、この光が消されることはありません。

口語訳で馴染んでいる人は、この新共同訳に少し違和感を感じるかもしれません。口語訳では「**1:5 光はやみの中に輝いている。そして、やみはこれに勝たなかった。**」となっていました。こちらの方が分かりやすい、イメージしやすい訳です。キリストは罪の闇の現実の中で光輝いている。この罪の世界がどんなに強大な力を持ち、目を覆いたくなる現実を造り出そうとも、キリストの命の光、希望の光を消すことは出来ない。そう聖書は宣言しています。これはキリストの

勝利の宣言です。ヨハネによる福音書は、このキリストの勝利の物語をこれから記していきます。

## 7. 暗闇の世界に響く「光りあれ」

そもそも、暗闇と光はどちらが強いですか。それは圧倒的に「光」です。どんなに深い漆黒の闇であろうとも、そこに光が点れば、それがどんなに小さな光であったとしても、闇はその光の届く範囲からは退かなければなりません。闇とは光がない状態のことだからです。光が点れば、そこはもう闇ではありません。闇は光を消すことが出来るのでしょうか？決して出来ません。

良いですか皆さん。この世界が出来る前からおられ、この世界の全てを、そして私共を造られたキリストが、私共の心を照らし、罪の闇を退け、命の光の中に生きるようにと招いてくださっています。そのキリストが今朝、私共に天地を造られた時のあの言葉「光りあれ」との言葉として与えられました。この言葉は無から全てを造り出される神の言葉です。「光りあれ」と告げられた以上、キリストの光は私共を包み、私共の心に命の光・希望の光・キリストの光が宿ります。そして、私共から傲慢・敵意・怒り・争い・我が儘・身勝手さといった罪の闇を追い払ってくださいます。そして、私共を御国に向かっての確かな歩みへと導いてくださいます。闇が光に勝つことは決してないからです。「光りあれ」！！

お祈りします。

恵みと慈愛に満ちたもう、全能の父なる神様。

あなた様は今朝、キリストである神の言葉が三位一体の神であり、全てに先立っておられ、全てを造られたことを教えてくださいました。そして、そのキリストが神様の言葉として私共に与えられ、命と光を与えてくださいます。あなた様は私共に「光りあれ」と教えてくださいます。この御言葉が出来事となり、私共があなた様の御光の中を健やかに歩んで行くことが出来ますように。

この祈りを私共の救い主、主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン